

T. M. 2024年卒 地域マネジメントコース

こんな学生時代を過ごしました

私はコロナ禍が始まった時期に入学したため、様々な制限の中で学生生活を送ることになりました。講義の多くは遠隔となり、部活動の大会も次々と中止。描いていた華やかな学生生活とは大きく異なり、当初は戸惑いも多かったです。そのような環境の中で、私は「キッズトレーニング実習」や「内田ゼミ」、そして「陸上部」の活動を中心に大学生活を過ごしました。

実習では、地域の子どもたちと運動を通じて関わり、運動の大切さや礼儀、リスクマネジメント等、多くの学びを得ました。活動時間等、制限はあったものの、制約があるからこそ内容を工夫しようという前向きな姿勢が生まれ、動画制作や屋内での活動案など、学生同士で創意工夫を重ねた日々が印象に残っています。

ゼミ活動では、フットパスを通じて自然や地域の魅力を感じながら、先生やゼミ生、地域の方々との交流を深めました。ただ歩くだけでなく、会話や景観、空気を味わう時間は、コロナ禍の息苦しさから解放されていました。卒論作成と就職活動の同時並行で慌ただしい時期もありましたが、振り返ればそれも含めてかけがえのない「青春」だったと感じています。

陸上部では、駅伝やマラソンといった自分との戦いが中心の競技に取り組みました。今でも社会人として走り続けていますが、大学のグラウンドは最も落ち着き、心が解放される場所でした。対面授業が少なく人と話す機会が限られていたからこそ、部活動を通して得た仲間は貴重な存在です。

また、私は実家生でバイト先も大学周辺ではなかったため、友人関係を築くことが難しい場面もありました。しかし卒業した今振り返ると、「コロナ禍でも充実していた」「辛いこともあったが最後は笑顔で卒業できた」と、結果的には自分なりにキラキラした学生生活を送れたのだと実感しています。過ごし方は人それぞれですが、限られた環境の中でも工夫し努力した経験は、今の自分を支える大切な財産となりました。

卒業後こんなキャリアを歩んでいます

地域創生学群での学びは、現在インフラ業界の事務系職として働く私の大きな基盤となっています。大学卒業後は社会インフラを扱い、地域の生活を支える企業に入社し、現在は事務作業を行いながら法人営業にも携わっています。学生時代に培った「多様な立場の人と協働する力」や「地道に積み上げる姿勢」は、社内外の多くの関係者と連携しながら仕事を進めるうえで大きな強みとなっています。

入社してからは、事務手続きや実績管理、スケジュール調整、書類対応などを通してインフラ事業の基礎を学んできました。現在も日々勉強の連続ですが、小さなミスが所内や会社全体に影響を及ぼす可能性があるため、正確さと丁寧さ、そしてスピード感を意識しながら業務に取り組んでいます。組織を支える役割を担っているという実感は、大きなやりがいにつながっています。

また近年はデジタル化が進み、AIを活用した会議の文字起こしやデータ作成、文章のチェックなども普及しています。インフラ業界も例外ではなく、新しい技術に適応し続けることが求められますが、こうした変化を前向きに受け止め、学び続けることが自分の成長にもつながっていると感じています。

今後は、より幅広い業務に挑戦しながら視野を広げ、将来的には組織運営の中心を担える存在へと成長したいと考えています。そして、地域の安心で安定した暮らしを支えるインフラ企業の一員として、これからも貢献していきたいです。

現役生へのメッセージ

大学生活は将来の土台を作る大切な時間です。勉強はもちろん大切ですが、多くの人と出会い、挑戦し、失敗する経験も大きな財産となります。社会に出ると答えのない課題に向き合う場面も増えますが、学生時代に身につけた「0から1を作り出す力」「自分で考えて行動する力」が必ず役に立ちます。焦らず一歩ずつ、興味や強み、視野を広げていってください。どんな経験もきっとあなたの武器になります。応援しています！



ゼミ活動「フットパス」を行っている写真です。コロナ禍中でしたが、マスクや消毒で感染対策を行いながら、楽しく築上町を歩きました。



現在も仕事を通じて、地域のイベントやボランティア活動に参加しています。これは、地域の山笠に参加した際の写真です。何事も経験です。